



自然農法を理解するためのキーワード

～無肥料栽培～

普及部 岩石 真嗣

近年、自然農法にもいろいろな流派が存在するが、人類救済を目指した岡田茂吉（1882－1955）の自然農法には、本質的な有益性があると我々は考えている。その理由は本誌にもあるように、我々が研究を進めてきた岡田の説く「自然を尊重し、自然を規範とし、自然に順応する」ことにより「土の偉力を発揮させる」という、土を主役とする農業に対する思想・哲学と実効性にある。この自然農法を正しく理解するために一見分かりにくい二つのキーワードが存在する。それが無肥料栽培と連作奨励である。無肥料栽培は肥料が無い栽培という意味で、連作は作り続けるほど土が良くなるという意味である。これらは自然農法の本質を表す一方で、現代の科学で解釈する時に誤解を招く言葉となっている。これらの言葉が持つ広く通じる科学的な定義と、岡田が伝えたかった内容との溝は深い。ここでは科学用語としては理解できない「無肥料栽培」の現代的翻訳を意図し、研究成果に基づく説明を試みてみよう。

いうまでもなく、岡田が著した「無肥料栽培」は科学的な論文ではない（本誌 p.48～50）。岡田の文脈は独特かつ明解で、説明により肥料の意味が 180 度転換する場合がある。人為的肥料がもたらす問題を「肥毒」と総称して、自然堆肥の使用を奨励し、有機・無機肥料を問わず、肥料毒を禁忌し肥料に依存した栽培を改めさせようと繰り返し努力している。この場合、有機 J A S に適合する肥料も例外ではなく、肥料の毒の有無が問題となる。肥料の毒として挙げているのは、肥料が病原菌や害虫の餌となり被害を増大させ、さらに農薬が土を弱らせること、少ない施肥によって最初は早く育つものが、次第に不足を生じ施肥量の増大を引き起こすこと等である。肥料が作る過剰栄養（高栄養）条件が、生物を含めた土壌（生態系）の力を弱め、肥料使用（高栄養状態）を継続する事によって、作物（遺伝子）や土壌（生態系）が力を失う（肥料依存となる）こと、肥料依存は習慣化（中毒化）すること等を警告した。

一方、岡田の言う無肥料栽培は無栄養ではなく、「土自体の栄養を吸収させる」「堆肥だけで画期的な成果が挙がる」農法である。「堆肥は大いに使う」ので、無肥料栽培から自然農法に名称を変更したのであり、栄養を肥料で補うことが問題で堆肥は肥料分がないとさえ言い切ることがあった。つまり、作物を育てるのは土が供給する地力であり、肥料ではないと強調することが「無肥料栽培」の主眼であった。その理屈の延長上で、当（公財）自然農法センターでは、堆肥や緑肥、発酵有機肥料（ボカシ）等の施用を、主役である「土」の能力を引き出す方法として土の肥沃度を高め、作物の健全性を高めることにより病虫害が軽減できるという成果を得ている。なお、土が理想的な状態になれば、堆肥も有機肥料も使わない方が、生産力が高まる場合がある。

当センターでは、収穫残さや肥料の有害性を除くことに重点をおき、有機肥料や堆肥を発酵・浄化させて還元する育土を奨励している。堆肥は堆積した肥料という意味が、緑肥には緑色の肥料の意味があり、自然農法を単なる「肥料不使用農法」とは思い込まない方がよいように思う。堆肥や肥料があっても、作物が健全に生育することを妨げず、栄養が土から適正に供給されるならば、土が主役となる無肥料栽培は成立する。土の偉力を発揮させる主役の土（肥料の塊）を際立たせ、肥毒（有害成分や過剰な栄養、中毒症状）を生み出さない栽培が自然農法であろう。今後、我々はさらに研究を深化させ、肥料に依存した農業が存続の危機を迎える前に、自然農法が持続的農業の主役となるよう努めなければならない。